

科学雑誌

光 学 天 文 連 絡 会

Group of Optical and Infrared Astronomers (GOPIRA)

会 報

No. 80

特集号
光天連の存続を考える

1996 年 12 月 28 日

光学天文連絡会事務局
(東京大学大学院理学系研究科天文学専攻)

目次

1 アンケートのまとめ	
1.1 アンケートのまとめ	1
2 光天連は必要か?	
2.1 光天連は必要か?	5
3 今後の光天連の活動形態について	
3.1 今後の光天連の活動形態について	8
4 会費削減案	
4.1 会費削減案	9
5 お知らせ	
5.1 光天連シンポジウム	10
5.2 すばるファーストライトシンポジウム2	12
5.3 会員異動	15

付録: アンケートに寄せられた意見

光天連の存続に関するアンケートについて

1996 年 12 月 17 日

東京大学教
養学部

東京大学大学院総合文化研究科

広域科学専攻 宇宙地球科学

上 野 宗 孝

既に前回の会報で案内させていただきましたように、光天連の存続に関するアンケートを行い、その結果を受けて秋季天文学会年會中に光天連の総会を開催しました。このアンケートの趣旨は、前回の会報にまとめさせていただきましたので繰り返しになりますが要約を以下に付けます。

アンケートの趣旨について、

光天連の存続について運営委員会・拡大運営委員会・体制ワーキンググループなどで議論されてきました。議論の結果として最終的にアンケート投票を基に運営委員会で存続に関する議論を行い、最終的な決議は光天連の総会に諮ることとなりました。

近年の光天連の活動性は、極めて低くなっております。この傾向はここ 3～4 年特に強くなってきています。事例としては光天連総会・懇談会での参加者数の少なさと運営委員選挙の投票率の低さに如実に現れており、上位当選者ですら十分に光天連の総意で選ばれたのかどうか疑わしい状況となっております。また学生の新規加入者も近年少なく、末期的現象の典型的な姿を露呈しています。この問題に対処し、光天連の会員のアクティビティーを見直すため、このような傾向が明らかになってきた 3 年前には、年会費を 2 年以上滞納されておられる方を脱会扱いとさせていただくという規定を設けました。しかしこの規定はある程度の脱会者を発生させ、会費の滞納率を減少させたものの、実質的な活動に正負どちらの方向にも影響を与えませんでした。

このような活動性の低下は、光天連の結成当初の目標であった大型光学赤外線望遠鏡「すばる」計画が実現しつつあり、結成当初の大目標の実現が図られることとなったことによる自然の方向性とも考えられます。確かにすばる望遠鏡計画が国立天文台を中心とする実務的なレベルに移り、大学との距離が開き始めたのと時を同じくして、光

天連の活動の低下が始まっているのを見ても、その因果関係は明らかです。しかし現在我々の置かれた研究環境を考えると、光天連の役目は終わったとは言い難いのではないのでしょうか。大学研究者の研究環境は光天連結成時と比較して実質的にはそれほど改善していないと思われます。また日本の光学赤外線天文研究者にとってすばる望遠鏡の実現だけで十分と言えるのかという問題もあります。また実務的な段階に進んだすばる計画も、光天連のメンバーの方から既にすばる計画は我々の手の届かない所に行ってしまったという話を聞くことが多いのも事実です。

現在の光天連の置かれた状況に関しては、比較的年配の方々にはすばる望遠鏡の実現が最大であり、その次というのは自分に関係が無いので、それほど深刻に考える必要がないと思って活動に積極的に参加されなく、それに対して、先の計画に関係がある人の中で比較的中堅の年代の方の人口が少ない（確かに人口構成はそうなっている）。またさらに若手の危機意識が薄いという悪い解釈も成り立つのではないのでしょうか。さらに敢えて苦言を書けば近年の若手天文研究者の中には、プロジェクトは自分で推し進めるのではなく、（お上から）与えられるものであるという意識が非常に強く蔓延しているのではないのでしょうか。光天連の活動の低下が本当にこのような事情であるとすれば、現在の状況は真に危機に瀕しているといえます（注：『お上』とは、官僚のことだけの意味ではない）。

すばる望遠鏡という大計画が、比較的小さな学術組織である天文・天体物理の世界から採択されたことは、我々にとって大なる幸せでありますとともに、大きな義務を負っていることを認識する必要があります。すばる望遠鏡計画は世界の大望遠鏡計画と比較しても傑出した予算を要し、文部省の大型プロジェクトの中で、トリスタンに次いで史上2番目に大きな計画です（私の知りうる範囲では）。このため当然、世界でトップクラスの成果が当然のこととして期待されることは明らかです。しかしすばる望遠鏡の置かれた立場は、容易に世界トップクラスの成果が出せるほどに楽観的な状況と言えないと。すばる建設現場のすぐ隣りでは、複合鏡とはいうもののKECK望遠鏡という大望遠鏡がいち早く稼働を始めており、近年では既にめざましい観測データを産みだしつつあります。そしてすばる望遠鏡とほぼ時を同じくして、GEMINI計画やVLT計画などの大望遠鏡が立ち上がります。従ってすばる望遠鏡は観測所の公開と同時に、既に先行しているKECK、KECK2望遠鏡やGEMINI、VLTなどの並み居る強豪が薙めいている土俵に真正面から飛び込まざるを得ない状況にあります。その上すばる望遠鏡で成果を出すための中小望遠鏡などの援護体制は他の計画と比較して明らかに貧弱です。しかし日本では地上の光赤外線以外の分野が、相対的に恵まれた体制を築いているため、それらの力を十分に利用できれば『めざましい』成果を生むことは十分可能だと思われます。

昨年度前半に活動しました光天連・体制ワーキンググループの会合で多くの議論を行いました。しかしそのWGでも問題となったことは、光天連の活動の一端として行っているWGのフィードバックを世の中に行う際に、光天連の意見であるということは現在でも本当に意味のあることなのだろうかということでした。光天連というのは学会

組織とは違って任意団体です。任意団体が圧力団体や影響団体として意味を持つのはその団体の活動が客観的に評価され、その団体から提出されている意見がその団体の概ね総意を表しているという場合のみに成り立つことです。しかし現在の光天連には、その点は全く欠落しているように思います。例えば先ほどのすばる望遠鏡計画に関する議論をワーキンググループが光天連に問い掛けた際にも非常に少数の反応しかなく、光天連の総意であるか否かの判断は不可能となってしまっています。このような事情から体制ワーキンググループや光天連運営委員会の席上で現在の光天連を解散し、新規に有志のみの集まりで『新光天連（例えば）』を立ち上げるべきであるという意見が出されるに至っております。

新光天連はたとえ会員数が少なくとも、それぞれの会員の組織に対するアクティビティーが十分に高ければ、今よりも意味のある活動を展開できると考えられます。また多数の参加者による議決をきちんと行うことが可能になれば、たとえ今よりも少数グループであってもそのグループの総意の意見であると答申することができるようになります。その実現のために現在の光天連をリセットしようという意見が出されています。

しかし一方光天連はある程度大きな組織であることは否定できません。これだけの規模の組織を解散後に再結成することは容易なことではないでしょう。現在の会員全体の意見を十分に反映することができるような変革をもたらすことができれば、この組織の大きさは大きな武器になります。従って極力現行の組織の延長線上での改革を考えようという意見もあります。

また光天連はどの官僚的な組織にも属さないニュートラルな団体であるため、広い視野にたつて長期的な展望や計画をじっくりと議論することができる組織です。この観点では、先ほども述べた他の波長域との連携のことも考えることも可能です。例えば宇宙電磁との合併を行い、さらに広い視野から将来のことを考える方向に向かうべきであるという意見も出されています。現に体制ワーキンググループの際には、電波観測を中心に仕事をされておられる人や、X線観測を中心に仕事をされておられる人にも、光天連の枠を越えてメンバーとして加わっていただきました。また光赤外線の分野に限っても、地上の望遠鏡計画と並行して赤外線衛星計画が行なわれています。そのようなプロジェクト横断的な議論には、やはり光天連のような広い視野にたった組織が必要であると考えられます。

以上のような経緯で最終的に光天連の存続問題については、会員皆様の総意を反映させようということになり、アンケート投票をお送りすることとなりました。以上の

趣旨に基づき以下のようなアンケート内容で会員の皆様の総意の調査を致しました。

1. あなたは光天連の存続を望みますか はい または いいえ
『はい』と答えられた理由。及び望むこと。または『いいえ』と答えられた理由

2. 光天連に対するご意見をお書きください。

これに対するアンケート結果は

回 答 総 数 37名

1の問いに対しては

は い 28名

いいえ 5名

その他 4名

となりました。光天連の存続を望む意見としては、情報伝達組織としての意義をあげられる方が圧倒的に多く、それに次いで現状までの活動を評価するというものでした。さらに情報伝達組織としての位置づけは光天連に属する光赤外線天文学以外の分野の方から強い意見として出されました。しかし残念ながら積極的に活動の目的に言及されたり、参加を表明された意見はほとんどありませんでした。これに対して存続を望まない声としては、現在天文月報や国立天文台報の情報伝達が十分機能しており、光天連の持つ情報伝達組織の意味合いが弱くなった点があげられ、強い意見としては現状の活動に対する会員の無関心さに関する光天連の存在意義に対する疑問があげられました。また『その他』と分類される意見としては現状の活動は問題があるものの、光天連という組織は必要であるということで、発展的解散と新規組織の編成を望むものでした。また存続を望まないもしくは『その他』に分類される意見の多くが現在光天連で中心的に活動されている方々から提出されていることを付け加えておきます。

以上がアンケート結果のまとめです。この結果の範囲内だけでは存続を望む声の方が多かったのが事実です。しかしアンケートの際にお断りしましたように、アンケートを提出されないことは消極的に光天連の存続を望まないものとも考えることができ、この観点に立つと存続を希望する会員数は低い割合であるとも言えます。

尚、このアンケート結果を受けた天文学会秋季年会での議論の内容は本会報に記載されています。

光天連は必要か?: 96 年秋の臨時総会での議論

宇宙科学研究所 中川貴雄
(光天連運営委員長代行)

日本天文学会 1996 年秋季年会の会期中に光天連の臨時総会を開催し、光天連のあり方についての議論が行われました。近年の総会としては例年になく多い数十名の会員の方の参加を得、今後の光天連の活動方針について、活発な議論が行われました。以下に、そのまとめを記します。

なお、この総会に先立ち、光天連の今後について、会員の方に光天連の存続についてのアンケートを実施いたしました。総会での議論は、このアンケートの結果をうけて実施したものです。アンケートそのものの結果の詳細については、この会報の上野氏による別記事をご参照ください。

1 光天連の設立目的

光天連は、「光・赤外線天文学に関心のある研究者の自主的組織」として、昭和 55 年に発足しました。当時は、だれもが次期の光学・赤外線望遠鏡の必要性を感じながら、研究者の間での議論がまとまらず、苦しんでいた時代でした。そこで、各研究機関を超えて、大きな視野にたって日本の光学・赤外線未来を議論する場として、光天連が結成されました。

具体的には、以下の 3 つを獲得目標として、光天連は創立されました。

1. 次期望遠鏡の実現
2. それを実現するための体制
3. 海外協力の推進

それぞれの目的は達成されたのでしょうか。

1 番目の「次期望遠鏡の実現」は、日本の天文学会の総意として「すばる」という巨大計画を推進することで、実現されそうです。2 番目の「体制」についても、共同利用機関としての国立天文台が発足し、「すばる」が推進されたことで、大きく前進しました。最後の「海外協力」についても、「すばる」はもちろんのこと、それ以外の多くの分野において、16 年前とは比較にな

らないほど国際協力が盛んになりました。これらの実現は、もちろん光天連だけではなく多くの方々のご努力があったおかげですが、光天連も大きな寄与をしたことも事実だと思います。

すなわち、光天連は、創立期に掲げた3つの獲得目標の実現に大きな役割を果たしたと言うことができると思われます。

2 現在の光天連

しかし、これらの「創立期の目標」がほぼ達成された現在、光天連は発足当時のような生き生きとした活動性を失ってしまいました。「すばる実現という大目標が光天連の手を実質的に離れてしまった」と、会員の大部分が感じてしまった現在では、光天連の存在意義そのものが、明白ではなくなってしまったのです。

3 今後の光天連の活動目標

このように、光天連は創立期の目標をほぼ達成しました。したがって、もはや、光天連は必要ないという声も聞かれました。

しかし一方で、光天連にはまだまだすべきことが多々あり、今解散すべきではないという声も多く聞かれました。今後の光天連に望むものとしては、主に以下のような声が聞かれました。

1. 光・赤外線の世界を展望する： 光天連の最大の役割は、やはり光・赤外線の世界を展望する場を提供することです。

1.1. 機関を越えた大きな立場からの検討： 例えば、現在「すばる」計画は順調に進んでいるとはいえ、「すばる」を立ち上げ、そのために必要な観測機器を開発し、機能的な運用体制を確立して、「すばる」から本当の天文学的成果をひきだすのは、これからの努力です。そのためには、各研究機関をこえて大きな視野にたつて、光学・赤外線天文学の発展を目指す、光天連のような組織が必要不可欠なはずです。

1.2 地上/スペースの区別をこえた立場からの検討： 次世代の光学・赤外線天文学の発展のためには、地上からの観測はもちろんのこと、スペースからの観測も欠かすことができません。その健全な発展のためには、大きな視野にたつ光天連のような組織が必要です。

1.3 波長を越えた大きな立場からの検討： 今や、天文学研究は1つの波長だけに閉じて議論を行うことは少なくなりました。天体の真の理解のためには、多波長にわたる観測が必要です。そのためにも、宇宙線や高エネルギーのグループとも連携し、観測天文学の未来を拓いていかなければなりません。

1.4 観測/理論を越えた大きな立場からの検討： もちろん、理論側などとも連携し、日本の天文学の真の発展を目指すことも大切です。

2. 関連研究者の意見集約機関： 光・赤外線の関係研究者には、共通の目的があります。そのためには、力をあわせてその目的の実現に努力せねばなりません。しかし、光・赤外線の関係研究者は、多くの大学・研究機関に分散しています。そこで、光天連のような全国レベルの組織が、関連研究者の意見集約機関として役割を果たすことが期待されます。

3. 情報伝達機関： 光・赤外線の関係研究者には、共通に興味をもつことが数多く存在します。多くの機関に分散した研究者に、有益な情報を伝達するためにも、光天連のような組織が必要です。

4 今後の光天連の活動形態

このように、光天連は今後も必要であるという声が多く聞かれました。その一方で、もはや今の光天連は、設立期の光天連とは異なることも事実です。そこで、光天連をより“スリムにアクティブに”するために、活動形態を以下のように変更してはどうかという声も多く聞かれました。

会員再登録： 今の光天連の会員の中には、残念ながら光天連の活動にすでに興味を失い、何の意見も出さず、何の活動もしない会員が多数含まれています。光・赤外線天文学の将来を語るべき光天連にとって大切なことは、会員数が多いことではなく、活動的な会員から構成されていることのはずです。そこで、会員再登録をおこない、会員に光天連の存在意義を見つめなおしてもらいべきであるという意見がでました。同時に、すでに光天連の活動に興味を示さない会員の方には、この際脱会していただいではどうかという意見が多く聞かれました。

運営委員会の縮小： 活動的な光天連のためには、運営は身軽であるべきです。現在は運営委員を選挙で10名選出していますが、実質はごく少数の方により運営されているのみですし、現在の運営に10人もの人数が必要とも思われません。現在の選挙による選出方法も、このように投票率が低くては、実効的とも考えられません。そこで、運営委員会を世話人会と名前を変え、人数も減らし、事務局との関係も含めて選出方法も見直すべきという意見が多く聞かれました。

電子媒体の活用： 現在の会報が有用であることは事実ですが、その発行が事務局のかなりの負担となっていることも事実です。そこで、会報の発行形態を電子媒体を活用したものへとしだいに移行すべきであるという意見が多く出ました。

会費削減： 上記のような活動方針の形態の改定(特に会報の印刷媒体での配布の縮小など)を行えば、現在のような会費は必要でなくなります。また、現在の会費の徴収率も必ずしも高くありません。そこで、会員再登録にともない、それにともない、会費の徴収率をあげ、同時に会費の値下げを行うことが提案されました。

今後は、これらの議論を受け、具体的な活動方針を運営委員会で検討することとなりました。

今後の光天連の活動形態について

光天連運営委員会

秋季年会における臨時総会での議論を受けて、今後の光天連の活動形態について、運営委員会で議論を行いました。以下に運営委員会からの具体的な提案を示します。

これはあくまで運営委員会からの提案です。この提案をもとに、皆様からの議論を受けて、春の学会における総会において、これからの光天連の運営方針を具体的に決定したいと思います。皆様からのご意見をお待ちしています。

1 会員再登録

光・赤外線天文学の将来を語るべき光天連にとって大切なことは、会員数が多いことではなく、活動的な会員から構成されていることです。そこで、より「スリムでアクティブな」光天連を目指して、平成8年度の終りに、会員再登録を行います。これは、会員の方々に光天連の存在意義を見つめなおしてもらう意味も持ちます。

2 運営委員会の縮小

運営を身軽にするために、運営委員会を廃止します。かわりに、世話人会5名を設けます。世話人会とは別に事務局は従来通り設けます。5名の世話人会のうち1人は、事務局員を兼ね、この世話人が事務局を組織します。世話人会は、立候補・推薦などを活用して、人が固定化しないよう配慮します。事務の繁雑さを避けるため、事務局・世話人会の任期は2年とします。

3 会報の電子媒体化

会報の発行は今後も続けます。ただし、事務手続きの簡易化を目指して、電子媒体の活用を進めます。具体的には、会員再登録時に、会報の受取手段を各会員に選択していただき、電子媒体でも良いという会員には、TeX file の形で (StarFormation News Letter や AGN News Letter の形)、会報を送付します。電子媒体では困るという会員には、TeX を紙に打ち出したものを、従来とおり郵便で送付します。

情報の迅速な配布を目指して、電子メーリング・リスト“gopiranet”の運用は、今後も続けます。

4 会費削減

上記の変更にともない、会費を削減します。具体案は事務局による記事を御覧ください。

(文責、宇宙科学研究所 中川貴雄)

会費削減についての考察

96 年度事務局

1 年間にかかる経費

会報発行	1 回につき	約 10 万円 (300 部)	年 4 回	約 40 万円
名簿発行	1 回につき	約 6 万円 (300 部)	年 1 回	約 6 万円
その他				数万円

たとえば、95 年度は、会報を 4 回、名簿を 1 回発行し、雑費を合わせた支出総額は約 52 万円でした。

会費削減についての考察

現在、会報は 1 回当たり約 300 部印刷・発送していますが、それにかかる経費は、一回の発行あたり、雑費込みで 10 万円強です。これを会員数 300 で割れば、約 400 円 / 会員となります。これを会費でまかなうとすると、会報の年間発行回数を N として、

$$\text{会員が払うべき会費の平均額} \simeq 400 \times N \text{ 円}$$

ということになります。たとえば、年 2 回発行する場合は、会員 1 人当たりの会費は約 800 円です。ただし、会員数があまりにも減少すれば、会報 1 部当たりの印刷代が割高になるので、会費もその分高くしなければいけません。一方、会報の内容を減らせば 1 部当たりの費用は減ります。したがって、上の見積りは目安と思ってください。

1996 年 12 月 9 日現在、光天連には 68 万 5269 円という高額の貯金があります。もしこの貯金を切り崩すことによって会報発行などの経費をまかなうとすれば、たとえば会報を年 2 回にした場合、仮に会員数が現状のままの場合でも、会費を取らずに 2 年以上運営できます。

会報や名簿を email で配布することにすれば、配布にかかる費用はゼロになり、会費もほとんど要らなくなります。

96 年度光天連シンポジウム

「すばる」をどう使うか？

～すばる望遠鏡の長期利用プログラムを考える～

場所: 国立天文台三鷹講義室

開催日: 1997 年 1 月 7 日 (火) 午後～1 月 8 日 (水) 午前

光天連は「すばる望遠鏡」計画の実現、をこれまで大きな柱として活動してきました。そして今、すばる望遠鏡は 1998 年のファーストライトを迎えようとしております。そこで、今年の光天連シンポジウムでは、すばる望遠鏡をどう使ってどのようなサイエンスをするのか、光天連という自由な立場から考えてみたいと思います。またこのシンポジウムは、「第 2 回 すばる望遠鏡ファーストライトシンポジウム」の直前に予定されております。多くの方々の参加を期待致します。

☆ 想定する状況 ☆

1. 観測者には約一月の観測期間が割り当てられている、
2. 観測者は、現在立ち上げが予定されている、すべての観測装置を利用することができる、
3. 必要ならば、現在想定されてない装置も（自分で持ち込むなどして）利用することができる。

このような状況のもとで、すばる望遠鏡の重点的かつ比較的長期の利用計画を考えてみたいと思います。面白くユニークなアイデアが生まれれば、今後のすばる望遠鏡の運用計画の立案に大きく役立つのではないかと思います。

名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院理学研究科

松原英雄

maruma@toyo.phys.nagoya-u.ac.jp

(シンポジウム世話人)

素粒子宇宙物理学専攻

TEL 052-789-2560

FAX 052-789-2919

(仮) プログラム

1 月 7 日 (火) 午後 1:00 ～ 5:10

[講演時間 + 討論時間]

1. 運営委員長代行あいさつ [10 分] 中川 貴雄 (宇宙研)
2. 背景 X 線源としての AGN・セイファート銀河光学サーベイと High-z 大規模構造 [15+5 分] 林野 友紀 (東北大理)
3. 星形成領域のイメージング観測 [30+10 分] 立松 健一 (国立天文台野辺山)
4. 惑星系および褐色矮星の形成過程 [30+10 分] 観山 正見 (国立天文台)
5. すばるが一月使えたら [30+10 分] 林 正彦 (国立天文台)

— 休憩 (20 分) —

6. 分子雲に隠れた高温星のサーベイ [15+5 分] 松原 英雄 (名大理)
7. 木星オーロラ：最先端の赤外線機器で探る惑星電磁気環境 [30+10 分] 佐藤毅彦 (NASA GSFC)
8. “IRIS 天体”のすばるによる追観測 [15+5 分] 中川 貴雄 (宇宙研)

1 月 8 日 (水) 午前 9:00 ～ 12:00

[講演時間 + 討論時間]

9. 宇宙論的パラダイムによる銀河形成 [30+10 分] 郷田 直輝 (阪大理)
10. 宇宙のはてを目指す、すばると X 線望遠鏡群 [30+10 分] 国枝 秀世 (名大理)
11. 遠方天体の LMSA と SUBARU の共同観測 [15+5 分] 川辺 良平 (国立天文台野辺山)
12. 銀河形成に関わるハローの成長と星形成条件を探る [15+5 分] 花見 仁史 (岩手大人文)
13. すばるをどう使うか? [30+10 分] 谷口 義明 (東北大理)

— まとめ / 議論 (20 分) —

第2回 すばる望遠鏡ファーストライト シンポジウム

(2nd Announcement)

国立天文台では、今年1月に開かれた第1回シンポジウムの成果を踏まえ、いよいよあと2年足らずに迫ったすばる望遠鏡のファーストライトから試験観測に向けての観測研究計画を討議する場として、“第2回 すばる望遠鏡ファーストライト シンポジウム”を開催いたします。

- 開催期日：平成9年1月8日(水)ー10日(金)
- 場 所： 国立天文台(三鷹)講義室
- 世話人： 佐藤 修二(名古屋大)
中川 貴雄(宇宙研)
関口 和寛(国立天文台)
柏川 伸成(国立天文台)

□ 方針： 本シンポジウムでの議論の目標；

- a) 各観測装置の具体的な観測計画と成果目標案の提示、
- b) ユーザーへの要望・ユーザーからの要望を議論する、
- c) すばる望遠鏡における観測の独自性を明確にする、
- d) 立ち上げ体制・立ち上げイメージ案を示す、

等を予定しています。

また有意義な議論を進めるために；

- 1) 第1回と同じ内容の発表は省略する、
- 2) 望遠鏡、観測装置の設計、性能等はあらかじめ資料を作成、配布、Web等で公開し、本シンポジウムでは長々と説明しない、
- 3) 装置開発グループ以外からの意見表明の場を設け議論を重視する、

という方針です。

詳しくは <http://optik.mtk.nao.ac.jp/~fsl/fsl.html> をご覧ください。

□ プログラム案：(時間配分は発表内容を検討して調整します)

1月8日(水)

Session I 進捗状況と今後のスケジュール

座長：安藤裕康

13:30-15:00

計画のスケジュールと本シンポジウムの獲得目標 海部宣男(20)

計画の進捗状況 唐牛宏(50)

議論(20)

休憩(20)

座長：林正彦

15:20-17:20

自動交換装置 野口猛(15)

試験調整装置 西村徹郎(15)

可視検出器 宮崎聡(15)

赤外検出器 西村徹郎(15)

ソフト/計算機 近田義広(15)

エンジニアファーストライトのイメージ 田中清(15)

議論(30)

1月9日(木)

Session II 観測装置のファーストライト/試験観測計画

座長：佐藤修二

09:00-10:30

Suprime-Cam 岡村定矩(20+10)

FOCAS 柏川伸成(20+10)

OHS 岩室史英(20+10)

休憩(15)

10:45-12:15

IRCS 小林尚人(20+10)

CIAO 田村元秀(20+10)

COMICS 山下卓也(20+10)

座長：西村徹郎

13:30-14:30

HDS 比田井昌英(20+10)

AO 高見英樹(20+10)

休憩(20)

14:50-16:20

3D分光器 菅井肇(20+10)
PASPIII 山室智康(20+10)
赤外モザイク 市川隆(20+10)

16:20-16:40

議論(20)
休憩(20)

Session III ユーザーからの観測提案(I)

座長：近田義広

17:00-18:40

- 1 日本の小惑星探査ミッションターゲットの観測 安部正真(20)
- 2 小惑星のサイズ分布を100m以下まで延長する 中村 士(20)
- 3 太陽系外縁部探査計画(I) 渡部潤一(20)
- 4 太陽系外縁部探査計画(II) 一戦略一 布施哲治(20)
- 5 北天でのMACHO探査 柳沢俊史(20)

19:00-

懇親会(∞)

1月10日(金)

Session III ユーザーからの観測提案(II)

座長：家正則

09:00-10:10

- 6 背景X線源としてのAGN・セイファート銀河光学サーベイと high-z 大規模構造探索 林野友紀(20)
- 7 The Project "MAHOROBA" Yoshiaki Taniguchi(20)
- 8 すばるの長期利用についての光天連での議論 松原英雄(30)

休憩(20)

Session IV 総合討論

座長：唐牛宏

10:30-12:00 立ち上げ、試験観測運用方針について
試験観測への参加方法について 等

会員の動き

異動

泉浦秀行	(新)	国立天文台岡山
		〒 719-02 岡山県浅口郡鴨方町大字本庄
	(旧)	東京学芸大
杉本大一郎	(新)	東京大学大学院総合文化研究科広域システム科学
	(旧)	東京大学教養学部
早野裕	(新)	郵政省通信総合研究所宇宙通信部宇宙技術研究室
		〒 184 小金井市貫井北町 4-2-1
	(旧)	東京大学
三浦則明	(新)	北見工業大学情報システム工学科
		〒 090 北見市公園町 165
	(旧)	北海道大学
高羽浩	(新)	郵政省通信総合研究所企画部国際研究交流室
		〒 184 小金井市貫井北町 4-2-1
	(旧)	郵政省通信総合研究所鹿島宇宙通信センター

アンケートに寄せられた意見

(残念ながら全ての御意見を掲載することはできませんでした)

松原英雄 (名古屋大学理学部物理Ⅱ研)

あなたは光天連の存続を望みますか・・・はい

「すばる」は実現したのでしょうか？まだです。誰も観測を始めたわけではありません。それなのに、光天連が存在意義を失っている、という現状にまず、私は疑問を覚えます。つまり、光天連の存在意義が希薄なのではなく、その体制・運営方法に問題があるのではないかと私は思います。悪く言えば、天文台は光天連の意見を気にすることなく、独自に「すばる」計画を推進しておりそれに対して光天連は何も言わない、という体制が悪いのではないのでしょうか？「すばる」計画はもはや実務レベルということですが、実際に観測しデータを得ていく上で、もはや問題が何もないはずがない、と思います。

また光天連の会員名簿をみると、「すばる」を中心的に推進している天文台の人だけでなく、かなり多くの地方の大学・研究機関に所属する方が多く存在します。こういった人達への情報伝達という仕事は光天連の重要な役割の一つだと思います（もちろん、これだけで光天連の存在意義がなりたつとは思えませんが）。

光天連に対する意見

将来についていえば、私は「すばる」以後の、光学・赤外線天文学の将来を議論することが、光天連という場の最重要の役割だと思います。より遠く、より深くへと観測を拡大していけば、赤方偏移のために可視光は近赤外へ、近赤外は中間赤外へと興味あるスペクトルが移動して地上からは観測できない波長に到達します。従ってスペースからの光学・赤外線観測へと移行することは、天文学の発展の上での「歴史的必然」であるとさえ私は思います。しかしながら、スペースからの観測は、（一部をのぞいて）地方の研究者にとっては遠い世界のできごとに思え、実感がわかないのではないかと思います。従ってまず必要なことは、近年のネットワーク技術の発展を利用して、光天連会員相互の情報交換、将来計画の検討などの議論を活発に行うことではないでしょうか？スペースからの観測はどうしても長期にわたる準備が必要で、その点では特に若手研究者が光天連を推進していくべきだと思います。

私は光天連を解体することには反対です。解体はせず、体制・活動内容を抜本的に改革することで、光天連の活性化がはかれれば良いと考えます。また宇電懇との合併も反対いたします。サイエンスの上での協力は、適宜拡大ワーキンググループを設ければよいと思います。

富田晃彦 (東京大学理学部天文学教育研究センター)

あなたは光天連の存続を望みますか・・・はい

最近の光天連シンポに出席して、大変有益に感じています。すばるで宇宙初期の観測をしようとか、月面天文台の可能性を探ろうとか、このような大きなテーマを、多数の研究者が集まって議論できるためには、光天連のような連絡組織が必要と考えています。若手研究者にとっても、多くの人と議論でき、発表などを通じて勉強できる、貴重な機会だと思います。今後も光天連シンポのような研究会の開催を望みます。

また、会報や gopiranet は迅速確実な掲示版として有益と感じています。一度解体してから、という意見もありますが、いずれにしても光の観測天文学の連絡会は、是非あってもらいたいと考えています。

能丸淳一 (国立天文台大型光学赤外線望遠鏡計画推進部)

あなたは光天連の存続を望みますか・・・いいえ

このような質問を会員にしなければならないような会はずに存在意義を失っていると考えられるから。一度解散して、必要であれば目的を明確にして再結成すればいい。現在の光天連は国立天文台の光赤外・太陽専門委員会の委員を推薦する機関(のはず)であるが、推薦する機関がなければ別の方法でも専門委員を決めることはできるから、それも構わない。専門委員を推薦することを目的とする機関として再結成してもいい。

光天連に対する意見

光天連はすばるという大プロジェクトの成立を推進してきた母体として、その意義は大きいものがあつた。しかし、現在はその次の活動方針を完全に見失っている。一部の会員が提唱している今後の光天連の活動内容は、本来研究者個人が個人の興味の延長として取り組むべき問題を光天連という大集団で扱おうとしているように見える。大望遠鏡計画を実現するには、それを全国の研究者が熱烈に求めているという姿勢を内外に示すことが必要だったので、光天連のような組織に大きな意義があつたのである。しかし現在、組織力を必要とする問題が目前にあるのか？かつては大望遠鏡計画を支えてきた光天連が、今やプロジェクトに対して何もものを言わないのは、すばるプロジェクトの中にいても寂しい気がするが、建設のフェーズには全国の大多数の研究者はおそらく興味がないということであれば、それも仕方がないのであろう。大きな組織はそれを維持すること自体が大変なのだから、意義を見いだせない会は直ちに解散するべきである。

渡部潤一 (国立天文台)

あなたは光天連の存続を望みますか・・・はい

統一した活動は活発でなくても、光学赤外線コミュニティ全体をまとめる一つの母体として存続は必要。しかし、組織があるから何かしなくてはならない、という論理はおかしい。現状はある程度、休眠してもいい時期ではないか。こういう組織はなにか取り組むべき問題があつて、初めて機能するものだから、私自身は存続を望む。

あなたは光天連の存続を望みますか・・・いいえ

現在の光天連は、会員ばかり多くて身動きがとりにくくなっている。また、設立当初の大目標（すばる計画の実現）を達成し、次の目標を定められずに、志気が低下している。新しい世代への脱皮も失敗しており結局旧世代の離脱と新世代の関心の薄さが連動して、空洞化を促進している！。このような実態を見る限り、光天連は今の形で存続していく意味はあまりないと思われる！一度解散し、新たに目標を持って再結成するのが良いと思う！このような組織／団体は光赤外コミュニティにとっては必要であると考えるので、光天連解散といっても、同種の組織の撤廃を意味しているのではないことは強調したい！

松本敏雄（宇宙科学研究所）

あなたは光天連の存続を望みますか・・・はい

光天連はすばる建設を全国の研究者の声として反映するために結成され、その目的を果たしました。しかし、国立天文台が全国共同利用研究所として設立され、国立天文台内に強力なグループがすばるの建設と運用にあたるにつれ、光天連の影が薄くなってきたことは否めません。今後もしばるに関連する研究の議論は国立天文台を通じて行うことが自然であり、光天連の存在価値があまりあるようには思われません。

したがって、これまでの光天連の役割の範囲にとどまるかぎり光天連の存在意義は無く、解散したほうが良いように思います。しかし、組織を潰すことは簡単ですが、一旦出来たものを再度つくるには膨大なエネルギーを必要とします。私は無駄を避けるという立場から、日本の天文学の発展のために光天連が出来ることは何かを再度真剣に考えるべきであると思います。

以下は光天連の役割についての私の個人的な意見です。

光天連に今後その存在意義があるとすればすばるに留まらない新たな目的がなければなりません。私はそれは「すばる以後の光・赤外天文学はどうあるべきか」を考えることであると思います。すばるは数年後に観測が始まります。また、宇宙研の赤外線天文衛星IRISも2002年に打ち上げられることが確実視されています。すばる、IRIS以後の大型計画の議論は国立天文台、宇宙科学研究所等で行われていますが、地上、スペースを含めた研究者全体が集まって議論出来る場所はこれまでのところありません。21世紀にはスペース観測の重要性が一層高まることが予想され、光・赤外天文学の将来計画の検討が早急に必要とされていると考えます。光天連は研究者の自主的組織であり、国立天文台や宇宙研と等距離の立場で将来計画の議論にリーダーシップを取ることが原理的に可能です。ワークショップ、シンポジウム等を組織し、提言をまとめ、天文研連に将来計画を提案をするような活発な活動を期待したいと思います。

現在の光天連にこの活動が可能かどうかについては私は良くわかりませんが、以下のような点について注意すべきであると思います。

- * 国立天文台や宇宙研の直接的な利害を代表することがないように、大学関係者がリーダーシップをとること。
- * 21世紀を目指す長期的な議論であることを考慮し、出来るだけ若い人が中心となって積極的に発言すること。

あなたは光天連の存続を望みますか・・・はい

（ただし、今の光天連は解散し、新制光天連を発足させるという形で）

「すばる」計画が光天連の手によって実現したという歴史的経過を非常に評価しています。日本の光赤外線天文学をめぐる状況をさらに改善し、発展させていくための計画立案・推進機関としての新たな活動を望んでいます。

光天連に対する意見

30歳前後の若手研究者にとってみると、自身が研究の道に足を踏み入れたときには既に光天連は存在し、また「すばる」計画も順調に進みはじめていました。したがって、かつて大望遠鏡実現を熱望し、積極的に光天連を組織し推進してきた方々とは、あきらかに光天連への参加意識が異なるのは致し方ないところだと思っています。また、光天連の活動の最大目標が「すばる」実現であったならば、それが順調にすすんでいる今、活動そのものが沈滞化している現状もうなずけます。

では、光天連は今後、どうしたらいいのか？という問いかけに対しては、一度すっぱりと解散するべきだと思っています。「すばる」を実現したという諸先輩方の大きな偉業をもってして現在の光天連の活動は終えていいでしょう。「すばる」をどう使っていくかは、後続の人間が次の大きな目標・課題として考え議論していくことだと考えます。それを新制光天連の柱の一つにしていきましょう。「すばる」の運用体制や今後、明確な問題意識を持った、志をおなじくするメンバーが再度結集して新たにスタートすべきではないでしょうか。

また、誰もが思っていることですが、「すばる」が実現したからといって、日本の光赤外線天文学をめぐる状況は必ずしも満足のできるものではありません。例えば、残念ながら実現しませんでした。大学連合の海外天文台計画というのがかつてありました。あの計画で目標としていたような、大学間の共同運営で、運用体制が非常にフレキシブルな海外中口径望遠鏡があったらどんなにすばらしいでしょう。大学レベルでの研究・装置開発のアクティビティを増進させることはもちろん、「すばる」望遠鏡にとっても非常に強力な支援体制ができるはずです。

短期的・長期的にかかわらず、そういった魅力的な計画を実現させていくための大きな推進力、そんなものを私は光天連に期待していますし、自らも参加していきたいと思っています。

次なる大きな目標を掲げ、その旗のもとに集まる有志で新制光天連を！それが願いです。

（本当に個人的な意見ですが、

- ・ 大学連合の中口径天文台の早期実現
- ・ 次期軌道上大型光赤外線天文台の推進（例えばpost-IRIS or HST?）

を私は切望していますし、その目標に向けて活動できる場があるとすれば、それが光天連だと思っています。）

以上です。

あなたは光天連の存続を望みますか

存続を望まない

市川伸一（国立天文台）

まず、同じ分野の研究者が情報を交換したり議論を進めることによって、将来の研究をより理想の方向に向けていこうという「光天連の役割」が重要であることは言うまでもないことでしょう。

しかし、現在の光天連がその役割を担える組織であるかどうかということになると、私は「否」、と答えるしかありません。現在の光天連には以下のような欠点があります。

- ・研究者だけで構成されているわけではないので、問題意識が統一できない。
- ・情報を受け取るだけの幽霊会員が多く（会員300人ほどの組織でありながら、運営委員がわずか4～5票で当選してしまうなど情けない）、正式な決議もできない。
- ・（アンケートに回答するだけかもしれませんが）アンケートにも「××してほしい」という自主的有志組織のメンバーにしては情けない言葉も多く見受けられ、自発的に活動しようという会員が少ない。

光天連の果たすべき役割を全うするためには組織の面でも会員の意識の面でも大改革が必要であると思います。

このような構造的欠陥を持った組織を運営し、その理想を追求していくために、（一部の）運営委員や事務局の方々はなみなみならぬご苦勞をされています。現在の組織を保ったままの大改革は（会員の意識が画期的に変革されない限り）想像を絶する労力と時間が必要であると思います。

かけた労力と引き出せる成果の比を考えたとき、私は現在の光天連は解散し、将来について議論する意欲を持った研究者（+賛同者？）だけで新たな組織を結成するという意見を持つに至ります。

「志を失った有志組織は無意味である。」
「目的を失った組織を守る努力は徒勞である。」
「老朽した袋を修繕するより新たな袋を。」

あなたは光天連の存続を望みますか

改革を希望する

太田耕司（京都大学理学部宇宙物理学教室）

・新たな光天連は必要でしょうか？

もともと光天連は、大型光学赤外線望遠鏡をつくりたいという悲願のもとに結集した団体で、今や望遠鏡はできつつあるので目的は達成したわけです。むろん、まだ運用等について意見を集約、形成してゆくという役割はあると言えばあるんですが、これらの役割は国立天文台のなかにできている委員会でもかなり果たされているようです。また、光天連ではそれほど議論はないようです。（昨年のアンケートの結果をみると。）ということで、この意味ではもう解散しても悪くはないと思います。

しかし、光学赤外線天文学連絡会という趣旨から考えると、光赤外の次の大きなプロジェクトについて議論する場ととらえることはできます。具体的には、IRISの推進母体として役割を変えていくというのは、ひとつのオプションで、私自身もその可能性を提案してきたつもりです。むろん、光天連を解散して、新たに新団体結成を呼びかけてもいいわけですが、あるものを利用して再結成するという手も考えられその方が現実的かもしれません。今年度まではまだIRISとすばるの2本だてみたいな団体でしたが、次年度はIRISを主柱としていいかもしれません。

・どんな新生光天連か？

もし、上のような新生光天連にするなら、現状のままいく必要はないかもしれません。新しい酒はあたらしい革袋（でしたっけ？）にすればいいので、会員の再登録をしてもいいかもしれません。しかし、正直言って、関心があって残る人とそれほど関心なくて残る人と混ざると思います。まあ、それはしかたないですね。あまりに後者が多いと再考の余地ありです。最もそれほど関心ない層を関心層に変えていくにはいいターゲットかも知れない。また、かつての光天連みたいに天文台に対していろんな対抗案を出すというような活動は期待できないだろうと思います。

・別の有志団体にする？

光天連を解散したとして、その後昨年度体制WGみたいのを結成すればいい、というのは私もかねがねそう思うときもありました。その場合、そのようなグループは、若手（30台と20台後半くらいの人）が主流になって、「勝手に」有志として活動するという形態になるかと想像します。しかし、考えてみると、このような活動は光天連とは独立にやってもいいので光天連解散とは別問題のようにも思えます。

・情報伝達機関としての光天連？

光天連の他の役割として多くの人が期待していることは、情報収集です。このためだけに入会しているという人もおられるようです。かつては、天文台で行われている会議の内容を知ることができなかったのが大変貴重な会報だったわけですが、今はかなり（ほとんど？）のことは天文台ニュースで知ることができるので、その意義は薄れてきているようです。また、今なら g o p i r a n e t だとか t e n n e t に流れるような情報が会報に載っていた訳ですが、今となっては会報の意義はほとんどありませんね。ということで、会員再登録なんかするとこの辺の人達はくぎりを与えられたと思って脱会されるかもしれません。

・他の団体との関係？

天文関係では他に理論懇、宇電懇等の団体がありますが、やはりおおきなプロジェクトの推進母体としての役割を果たしたり分野間で利害が発生したときにはその存在が重いように見えます。このようなときに、光赤外だけがなんの組織も持たないのはちょっと損な気もします。これらの団体もそうめったやたらと活発な活動をしているようには見えません。この点だけ考えると、光天連は冬眠状態になってもいいかもしれません。普段はなーんもしなくても、何かことがあったときにはもぞもぞと動くという感じで。（事務局1人と運営委員5人位を常時おいておけば十分かと）

お名前：村山 卓

ご所属：東北大学理学部天文学教室

あなたは光天連の存続を望みますか

◎ はい

「すばる」に対するユーザー（候補）の意見を集約して、天文台と交渉していく団体はまだ必要だと思います。すばるが現実のものとして目の前に現れたのはじめて来た今、そこで何を行うサイエンスをしっかりと議論して煮詰めることは光天連のような団体でしかできないのではないのでしょうか？他波長との関係をすすめたり、すばるの運用方針を決めてゆくにはユーザーグループが不可欠です。ハードからソフトへと役割を替えながらもやるべきことはまだまだ残されています。すばるを使うユーザーの要望も良くわからないまま開発を進めていても決していいものにはならないでしょう。キープロジェクトのようなおおきな目標を掲げることが重要であり、それこそ光天連の役割です。

一度解散してより小回りの効く団体として再出発することによりあまりメリットは感じません。すばるの実現を切り開いてきた団体として、すばるの運用が軌道にのるまで責任をもって存続してゆくべきです。中心となる人々はそのように変わるわけではないのですから、ここで「なかったこと」にしてしまえば、新しい団体もまた第二の光天連になる可能性があるでしょう。今まで以上に多くの人の関心を惹くことがすばるの成功につながると思いますが、とりあえず会員の関心を惹くことができなくてはそれも難しいことです。また、興味深く読める会報や充実した光天連シンポは小団体で維持するのは大変でしょう。

お名前：大谷 浩

ご所属：京大理学部宇宙物理

あなたは光天連の存続を望みますか

○ はい

国立天文台、木曽シュミットなどの共同利用機関は、公式には各種の委員会などに外部研究機関の人をメンバーとすることにより外部機関の意志を運営に反映させている。しかし、これだけでは実際にはとても不十分であるので、光赤外の研究者のコミュニティの意志がよく反映されるためには、議論をしたり意向をまとめる緩やかな組織が必要であろう。共同利用機関側にとってもそのような組織があれば、意志や情報伝達に便利であろう。

さしあたっては、現在のような活動でいいのではないかな。すなわち、

1. 最低の活動として、ユーザーズミーティングには主体的な参加をし、研究者と共同利用機関の間の議論を充実したものにするよう努力する。
2. コミュニティ全体に関わるような大きな計画や問題が生じたときには、それに関する議論の場を設定する。
3. これらのことを、効果的に実行するために、必要と力量に応じて研究会等を開く。
4. 共同利用機関の外部委員の推薦などの活動は、コミュニティの意向が光天連自身でつかめない現状のような状態では、無理をして取り組む必要はない。出来るときにはするとよい。

5. 役員選挙を実行するエネルギーも現在は負担のようである。年度ごとの総会で決めるなど、省エネルギー化をしてはどうか。「運営委員(会)」という肩書きは、現状では多くの人に引き受ける精神的な負担を不必要にかけ。「世話人(会)」と名前を変えて人数も4-5名くらいにしてはどうか。このように規約を改訂する。

6. 事務局は現在程度には頑張ってもらい必要がある。これまでのように大きな機関で回り持ちなら、続けられないか。

お名前: 市川 隆

ご所属: 東京大学理学部木曾観測所

あなたは光天連の存続を望みますか

はい

いいえ

光天連を作り、育んで来た世代は決して現状に安住しているわけではありません。すばる計画だけでは不十分であったその他の課題、例えば教育、研究環境の改善にそれぞれの立場で尽力しています。むしろ若い世代の消極性に歯がゆい思いをするばかりです。今でも光天連の中で私たちの世代がイニシアティブを取るのとは簡単でしょう。しかしそれでは若い世代との間の溝は深まるばかりです。若手の将来は若手自身が開拓していくものです。正しいことに対して上の世代は積極的に支援します。少なくとも私が何も言わないように努めているのは若い世代が天文学の将来を自らの問題として認識し、実際に行動するのを待っているからです。今の若い世代の潜在的实力は私たちの世代よりずっと強いと思います。しかし自ら課題を掘り起こし、問題解決のために組織化をする實力は少ないように見受けられます。そのような實力があったら光天連の解散をうんぬんする前に行動を開始しているはず。積極的参加がないから光天連は無意味と考えるのではなく、自ら天文学の将来を考える時にどのような活動方法、組織化が必要かを考えた上で光天連の存続の意義を考えるべきでしょう。今の若い世代は實力があるので光天連を解散しても小さいながらも積極的なグループを数多く作るでしょう。実際に今でも現状への強い不満を持ちながら自ら道を切り開いている若手グループがいくつもあります。しかしそらを日本の天文学の将来と結び付けて光天連のような大きな組織を作る方向にはむかっていません。一般に今の若手は受け身な人が多く、彼らを自ら行動する組織に引き入れるのは至難のことでしょう。中川氏、上野氏の記事を読んで両氏には十分な問題意識があり、活動できる人たちと感じます。光天連の解散を目的とする議論ではなく、天文学の将来計画に関して若手に何が科せられているのか、そのためにはどのような活動が必要で、それに相応しい組織はどのような形態のものかを考えることにしましょう。その結論が出た時に果たして光天連という組織が課題解決にふさわしいかを見直して解散ないしは存続を結論しても遅くはないでしょう。

編集後記

今回は光天連の存続を考える特集号です。15年以上も前に光天連の発足に奔走したことを考えると長い年月が経ったことを実感します。多くの方々の貴重な御意見が掲載されていますので、皆で良く考えて新しい方向を見つけないといけません。(岡村)

光学天文連絡会会報 第80号 1996年12月28日発行 編集 岡村 定矩

発行元: 光学天文連絡会事務局

東京大学大学院理学系研究科天文学専攻

113 東京都文京区弥生 2-11-16

e-mail: kouten96@astron.s.u-tokyo.ac.jp

fax: 03-3813-9439

会費納入のための郵便振替口座: 口座名 光学天文連絡会

口座番号 00160-6-163169

事務局長 岡村定矩 okamura@astron.s.u-tokyo.ac.jp 03-5800-6880

庶務 土居 守 doi@astron.s.u-tokyo.ac.jp 03-3812-9224

(’96/8-’97/1 まで在アメリカ)

嶋作一大 shimasaku@astron.s.u-tokyo.ac.jp 03-5684-0516

会計 尾中 敬 onaka@astron.s.u-tokyo.ac.jp 03-5800-6884

印刷: (株) 東大教材出版 03-3813-7389